



毎年12月には、数人の海外の友人、知人にクリスマス・カードを送ります。なんと、そのうちの一通が6月下旬ごろに返送されてきたのです。不吉な予感が胸をよぎりました。封筒には宛先に大きく×印が記され、赤いシールが貼ってありました。シールにはいくつかチェックを入れるべき項目がありましたが、そのいずれでもなく、deceased と欄外に文字が読めました。また、赤字の日本語で「受取人死亡との理由で返送されてきました」というスタンプが押されていました。半年という時間はかかりましたが、この手紙は110円で、横浜ーロンドンの往復を果たし、私に悲しい知らせをもたらしてくれました。

お二人とも亡くなられなんて、信じられないほどです。日本では死亡などは個人情報として伝えませんが、イギリスの郵便局は正確さを期しているようです。



受取人のコーベットご夫妻は、私が、20年近く前に、ロンドンで語学研修をした時のホスト・ファミリーです。ご夫妻はロンドンの北西部のフィンチェリーにある住居—semidetached house と呼ぶそうですがーにお住まいでした。語学学校があるトットナムコートロード駅まで地下鉄で30分くらいの、閑静な、同じような家が並ぶ、整った住宅地にありました。

ロンドン一人で旅立つのは、本当に心細くて、見送りに来てくれた夫に横浜駅で大泣きの別れをしたのを懐かしく思い出します。ロンドンに着いたその日のうちに地図を片手に、駅までの通学路、郵便局の在処を確認、語学学校の下見に出かけ、地下鉄の定期券購入など、すべて一人でしなければなりません。英語が下手といって、手をこまねいてはられない日々が始まりました。



コーベット夫妻はホームステイのルールをプリントで渡し、非常にさっぱりした対応でした。退職された夫のデイックがB & B (朝食・ベッド提供) という仕事を引き受け、炊事、洗濯、掃除など家事を担当し、妻のアンジェラは公務員として働いていました。呼び方もファーストネームでOKということでした。フランス人、ユーゴスラビア人、トルコ人学生と同宿でしたが、彼らは、寝に帰るだけで、ほとんど夕方は3人だけになりました。

年齢が近かったので、話題が合い、つたない語学力を目いっぱい発揮し、会話を楽しみました。アンジェラは聞き役としても忍耐強く、語学学校以上に、彼女との会話は訓練になりました。

デイックは元商社マンです。我が家は労働者階級で、大学に行ったのは娘が初めてだと喜んでいました。彼の言葉から、イギリスに来て、階級という観念がまだ色濃くあることに気づかされました。とてもオープンで、気さくです。私に洗濯ものを出せというのです。たくさん洗ってもらいました。

アンジェラは高卒ですが、フランス語、スペイン語、イタリア語も話せます。デボラ・カー似だと言うと、彼女はあちらは赤毛じゃないのと、美貌に自信があるような反応でした。日曜の朝は、ミルクティーをベッドで飲むというロマンチックな儀式を、デイックが叶えるという仲良しカップルでした。

それでも、お互いの趣味は譲らないとばかり、庭は左右に分けて、自分の趣味の植栽を楽しんでいました。それぞれに居間があり、デイックはシンプル・モダンで機能的、アンジェラは古風なセピア色がかかったアンティーク調が好き。二人とも酒・タバコなどはせず、デイックは健康志向の散歩が趣味、アンジェラはボランティアに参加など、堅実な生活ぶりでした。共通の趣味はTVの動物番組を見ること。二人で目いっぱい働いている、経済的余裕はないということでした。

お二人のおかげで、私は不安なく、ロンドンを楽しみ、語学研修が果たせ、笑顔で帰りました。また、ロンドンに行って、お訪ねしたいと願っていたのに、とても、寂しくなっていました。